



Title	<図書紹介>長田謙一・樋田豊次郎・森仁史編『近代日本デザイン史』
Author(s)	伊東, 徹夫
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 202-203
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52878">https://doi.org/10.18910/52878</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

長田謙一・樋田豊郎・森 仁史編  
 『近代日本デザイン史』(美学叢書03)  
 美学出版 2006年  
 伊東徹夫／京都市立芸術大学

本著は、1999年4月から2000年4月にかけて10回開催された「近代日本デザイン史をめぐる連続シンポジウム——デザインのモダニティ」を基にして編集されたものである。執筆者は、デザイン、建築、工芸、美術など幅広い分野の26人に及ぶ。

巻頭部に、幕末から1975年までの期間を8期に分ける時代区分が示される。これまでの類書の時代区分よりも少し細かく分期されている。

掲載論文が多く、全体で500頁を超える分量を持つものの、近代日本デザイン史の主な事象をカバーできるはずはない。各章の初めの「展望」において、それぞれの時代のデザインの特徴が簡潔にまとめられているが、この書物は、書名から想像されるような「近代日本デザイン通史」を目的としたものではない。しかし、一通り通史を学んだ者にとっては、刺激に富んだ論文集である。盆栽や手芸についての論考に代表されるように、ともすればこれまで看過さらがちだった分野に関する研究や、新しい研究が数多く掲載されているからである。編者の言葉である「近代日本がデザインをどのように受容し、翻って、デザインが近代日本文化の形成にどのような役割を果たしてきたのかに関心をもち、日本の近代史のなかで、デザイン概念自体の揺れ動きを素描してみたい」という目的を達成する上で、確かな手がかりになる成果が得られたと言えよう。デザインの分野に限らず、「近代の日本」を考察しようとする者に様々なヒントを与える書物である。

掲載論文すべての題目をあげることが、こ

の書物の紹介として最適の方法であろう。

各章の時代区分と掲載論文は以下のとおりである。

- |   |       |
|---|-------|
| I 幕末～明治20年《工芸とデザインの混沌》                  |       |
| 展望                                      | 樋田豊郎  |
| 有田磁器の江戸と明治                              | 鈴田由紀夫 |
| 万国博覧会の工芸デザイン                            |       |
| ——陶磁を中心に                                | 伊藤嘉章  |
| 「工芸」でも「デザイン」でもなく？                       |       |
| ——珊瑚樹鉢植物、生け花、盆栽、そして手芸                   | 大熊敏之  |
| II 明治21年～明治44年《近代的工業概念の成立、様式的デザインとの出会い》 |       |
| 展望                                      | 森 仁史  |
| 納富介次郎の産業教育                              |       |
| ——その理念形成と図案指導をめぐって                      | 山崎達文  |
| 明治30年代の図案                               |       |
| ——アール・ヌーヴォーあるいは琳派                       |       |
|   | 土田真紀  |
| 明治期のデザイン教育                              |       |
| ——東京高等工業学校工業図案科の活動                      | 緒方康二  |
| III 大正元年～大正12年《デザインの岐路—産業と芸術》           |       |
| 展望                                      | 土田真紀  |
| 日本のアプライド・アート                            |       |
| ——大正期における工業と美術の再接近                      | 樋田豊郎  |
| 氷結せる音楽を創作せんがためなり                        |       |
| ——山田耕作の音楽堂構想と川喜田煉七郎の建築計画案               | 梅宮弘光  |
| 大正時代の工芸とユートピア思想                         |       |

- 富本憲吉とウィリアム・モリス  
木田拓也
- IV 大正13年～昭和5年《デザインのモダニズム》  
展望 水沢 勉  
工芸美術 — 現代性への試み 田境志保  
画家が夢見たモダニズム建築  
— 三岸好太郎のアトリエ 苛名 真  
建築と美術のあいだ  
— 1930年代から50年代の壁画 蔵屋美香
- V 昭和6年～昭和12年《デザイン教育と実践》  
展望 柏木 博  
東京高等工芸学校と型而工房 森 仁史  
封印されたバウハウス  
— 水谷武彦の記憶 長田謙一  
東京美術学校デザイン教育略史 吉田千鶴子
- VI 昭和13年～昭和20年《デザインとナショナリティ》  
展望 長田謙一  
体制とデザイン ドイツとイタリアの場合  
— 「デザインинг・モダニティー展」から 遠藤 望  
「美の国」NIPPONとその実現の夢  
— 民芸運動と「新体制」 長田謙一  
山名文夫 — デザイナーと戦争 矢内みどり
- VII 昭和21年～昭和35年《デザインの大衆化》  
展望 嶋田 厚  
生活工芸とデザイン  
— 新工芸協会の活動を中心として 諸山正則  
戦後のデザイン振興策  
— Gマーク制度から無印良品まで 青木史郎
- 転換期としての1960年代  
— デザインへの疑問、批評、異議申し立て 大竹 誠
- VIII 昭和36年～昭和50年《高度経済成長時代のデザイン》  
展望 森山明子  
トヨタ自動車のデザイン 森本眞佐男  
メディア — デザイン — 広告 佐野 寛